

2011.3.22

趣意書

被災地の子どもたちに遊びとおもちゃを！

NPO 法人アジール舎

代表 亀口公一

現在、被災地ではどれほどの子どもたちが避難生活をおくっているのでしょうか。子どもに関する情報がほとんど入らないので大変心配している。未曾有の 3・11 東日本大震災以後は、日本中有事である。これまでの日常生活を問い直すことも含めて何事もなく無事に生活している人は、おそらく独りもないであろう。親／大人は、過酷な環境変化や厳しい現実を受け入れざるをえないため、日本中の人たちに食べ物やガソリンなどの生活必需品の救援物資を必死に求めている。一方、子どもたちの姿や声は、私たちのところにはほとんど届いていない。

テレビでは瓦礫の中で母親に抱かれて肉親を捜す小さな子どもが、親の肩に顔を伏せて、何事もなかったのだと自分に言い聞かせるように必死にすがりついている。子どもたちはどのような厳しい環境であろうと、今、ここに生きる力を持っているから、彼らの笑顔や笑い声が、親／大人を癒し元気づけることも確かである。

しかし、その子どもたちはそれほど強いわけではない。また、今、自分がどのような状況に置かれているのかよく分かっていないことも確かである。親／大人たちは、支援を求める力があるが、子どもたちは、自分が必要とする支援を求める力（いわゆる受援力）がないのである。

だからこそ、私たち大人は子どもたちの声なき声に耳を傾ける必要がある。赤ちゃんがミルクとオムツを必要としているように、小さな子どもたちは「遊びとおもちゃ」を求めていることは間違いない。震災直後は、親がそばにさえいれば厳しい環境変化にもそれほど動じないが、長期化して親自身が疲弊したときにはかれらの心的な傷はそれだけ深くなっていく。近年、モノが溢れる豊かな時代にあつて幼児教育が多様化しているが、一方で「幼児期の空洞化」が進んでいると発達心理学者が指摘している。まさに避難生活にあつては、子どもの声は埋もれたまま、「発達の空洞化」が進んでいると言っても過言ではない。

子どもの発達にとって、避難所という劣悪な環境だからこそ「遊びとおもちゃ」が必要なのである。ある文化人類学者は、ヒトの本質は、ホモサピエンスであるとともにホモルーデンス（あそぶヒト）であると言っている。受援力を持たない被災地の子どもたちに替わって、子どもたちに「遊びとおもちゃ」が今こそ必要であることを改めて訴えたい。

私たちは、京都府の救援物資受付開始までに、地域住民から安全で精選されたおもちゃを集め、避難所に送る活動を計画している。できれば、「遊びスタッフ」を派遣したいが人を送ることはそう容易ではない。東京都の救援物資リストには、赤ちゃん用品、高齢者用

品があったが、子ども用品はなかった。子ども用品には、是非、文房具より「おもちゃ」を優先して入れてほしい。もちろん、不用な「おもちゃ」を集めて無闇に送るのではなく、できれば受け入れ先との連携を構築したい。今後さまざまな地域、団体から各避難所への多様な「おもちゃライン」が生まれ、子どもたちの笑顔と歓声が戻ることを願って止まない。そして、このような非常時にこそ「大人の品格」が問われているのだと思う。